

開催年月日	令和元年9月3日(火)		
質問者	日本共産党	真下 紀子	委員
答弁者	環境生活部長	築地原 康志	
	生物多様性担当局長	小林 隆彦	
	動物管理担当課長	藤島 京子	

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p><b>一 ヒグマの保護管理等について</b>                      ヒグマの保護管理等について伺ってまいります。                      札幌市をはじめ都市部の住宅地や農地でヒグマが頻りに目撃をされています。札幌市南区では一頭駆除されました。このことに対して抗議や反対の声など賛否の声が寄せられている状況です。ヒグマの生息地である北海道で、ヒグマと共存していくためにどう取り組むのか、私は新たな段階に入ってきたのではないかと考えているわけです。ヒグマが生息する北海道、人間と共存できるよう保護・管理をしていく必要があるという立場から、以下、質問してまいります。</p> <p><b>(一) 札幌市等のヒグマ対策への対応について</b>                      札幌市、江別市など都市部の住宅地へのヒグマの出没が頻りに起こっていて、現地の方たちのお声をお聞きしますと、非常に恐怖心があるということで、日常生活にも大きな影響が出ておりますし、子供の教育環境にも大きな影響が出ています。道はこれに対してどのように対応してきたのか、まず伺います。</p> <p><b>(真下委員)</b>                      ヒグマが目撃されたということで、様々な取組が始まってきているんだと思います。</p> <p><b>(二) 北海道ヒグマ管理計画について</b>                      鳥獣保護管理法に基づいて、ヒグマは、第2種特定鳥獣管理計画の対象とされておりまして、道は、新たに2017年、平成29年に2021年度までの5年間を計画期間とする北海道ヒグマ管理計画を策定しました。今、答弁でもありましたとおりです。計画策定にあたっての背景、目的について、お聞きをしたいと思います。また、計画の推進状況についても併せてお願いします。</p> <p><b>(真下委員)</b>                      ヒグマ管理計画のもとで色々行ってきたということなのですが、問題個体の対策やそれから過剰な捕獲による絶滅を回避する、こういう取組が主眼に置かれているわけですが、ヒグマの方も随分と環境が変わってきていると、それから人間社会の方も随分と環境が変わってきていて、ヒグマとどのような折り合いをつけていくか、こういうことが重要な問題になっているんですけども、この、やっとなってきたヒグマ管理計画なんですけども、現状の問題が出てきている、その現状の課題を見ますとね、この管理計画が十分に機能しているか、成果をきっちり上げてきているのかどうかと</p>	<p><b>(動物管理担当課長)</b>                      都市周辺での対応についてでございますが、今回、野幌森林公園で78年ぶりにヒグマが出没したことを受け、道では、道総研とも連携しながら、「北海道ヒグマ管理計画」に基づきまして、江別市に対して、捕獲を想定した体制整備や捕獲方法、農業被害防止のための電気柵の設置などにつきまして助言を行ってきましてほか、公園内のパトロールや利用者への注意喚起、ヒグマに対する理解を深めるための出前教室を近隣の小・中学校で実施するなど、事故の防止に努めてきたところでございます。</p> <p>また、8月に札幌市南区におきまして連日出没したヒグマについては、市と情報を共有しながら、追い払いや被害防止に対する助言を行っておりまして、連携して住民の安全確保に努めてきたところでございます。</p> <p><b>(動物管理担当課長)</b>                      「北海道ヒグマ管理計画」についてでございますが、この計画は、人身事故や農業被害など、人とのあつれきを引き起こす、いわゆる問題個体への対策を講じつつ、過剰な捕獲による個体群への影響を回避するよう、計画的に管理し、ヒグマとの共存を目指すために、平成29年に策定したものでございます。</p> <p>現在、計画に基づき、人身事故防止のための注意喚起やゴミの適正処理の徹底などの普及啓発、農業被害防止のための電気柵の設置促進などの対策を講じるとともに、地域における被害防除体制の構築などにも取り組んでいるところでございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>いう点が、厳しく道民の目から問われている状況だと言わざるを得ないと思うんですね。ですから、このところが非常に、作ったばかりの計画ですからね、作ったばかりなのでということになるのかもしれませんが、色々課題ができて、新たに出てきているわけですから、このところは、この計画のあり方っていうのを早期に見直していく必要性も出てきているんじゃないかと考えてございます。</p> <p><b>(三) ヒグマの生息状況、被害状況について</b> ヒグマの生息状況と、人身被害や、家畜・農業被害、及び、高速・JRなど交通事故も含めた被害状況というのはいったいどのようになっているか、お聞しいたいと思います。</p> <p><b>(真下委員)</b> ヒグマは増えているという状況だと思います。それから交通事故については、お聞きをしますと、JRが衝突するケースがありますが、エゾシカの場合はよけるだけでいいですけど、ヒグマの場合は絶命してないと危険なので、その対応に大変困難が生じていることも聞いておまして、今後はですね、こういう被害状況を見ていって、安全な対処の仕方っていうのは考えていくべきだと思います。</p> <p><b>(四) 捕獲数の推移、保護と駆除の基準について</b> 何故、こんなにヒグマ、激増してきたということなんですけども、北海道は1989年度まで、ヒグマの春駆除っていうのを行っていたということですが、絶滅の危険があってこれをやめています。そうしたこともあって生息数が増加傾向にあると考えられると聞いております。それでは捕獲数はどうなっているのか、その推移と、保護と駆除の判断基準についてお伺いしたいと思います。</p> <p><b>(真下委員)</b> ヒグマの増加に伴って駆除するクマの数も増えているということなんですけど、その中身を見ますと、狩猟による捕獲が70頭まで減っていますけれども、平成29年、2017年のデータですけれども、許可捕獲については781頭と増加傾向にあるわけですね。全体数としても昭和37年の数字に迫っていると、そういう事態になっていることが分かりました。1頭、その札幌でのヒグマを銃で駆除したとのことで、全国から批判の声が、様々な意見が寄せられたということですが、今、答弁にあったように、問題行動から有害性を判断するというので、有害性の判断基準をもとに示している、これは闇雲に駆除しているわけではなくて、ヒグマの増加に伴って、その安全性を確保するために、や</p>	<p><b>(動物管理担当課長)</b> 生息や被害の状況についてでございますが、道が平成27年度に行った生息数の全道推計では、平成2年度は3千5百頭から8千百頭の間、24年度におきましては約1.8倍となります3千9百頭から1万7千3百頭の間で生息しているものと推定しております。また、被害の状況といたしましては、ヒグマによる人身事故は、過去10年間で死亡事故が6件、負傷事故が21件、発生しており、農業被害は、平成に入ってから増加傾向が続きまして、平成29年度の被害額は1億9千8百万円となっております。家畜につきましては、ここ10年で多い年は、牛など24頭が被害にあっておりますが、近年は2頭以下で推移しており、交通事故につきましては具体的な数字の把握はできておりません。</p> <p><b>(動物管理担当課長)</b> 捕獲数の推移などについてでございますが、ヒグマの捕獲数は、「春グマ駆除」を開始するなど積極的に捕獲を推進してまいりました昭和40年代は、年間約5～600頭で推移してまいりましたが、春グマ駆除が最後に実施されました平成元年度は184頭まで減少いたしました。しかし、その後増加に転じまして、平成29年度は、データがある昭和37年以降、2番目に多い851頭が捕獲されたところでございます。ヒグマは個体により行動が異なるため、ヒグマ管理計画では、農作物の食害や人間につきまとうなどの問題行動から有害性を判断し、その段階に応じて捕獲の必要性など対応方針を定めているところでございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>むなく駆除しているという状況が見えてきたんだと思いますが、でもそれにしてもどうやって事故を防ぎながら、人身事故、無くなってないわけですから、事故や農業被害が多くならないように管理していくのか、そういう観点に立つ時期じゃないかと思います。</p> <p><b>(五) 駆除の方法等について</b>  ヒグマの有害駆除の方も手法が変わっておりまして、箱わな中心になってきています。人間が怖いという学習・教育効果がヒグマ社会の中に育っていないとの指摘があります。駆除の方法では、狩猟者が高齢化して山奥までクマを追って行って、クマが人間を怖いものとして認識することが減っていたり、住宅地での銃による駆除への理解がなかなか難しかったり、安全性確保に課題がある。それから麻酔捕獲のリスクなどについても様々な意見があるわけですが、道としては、どのように考えているのかお示しいただきたいと思います。</p> <p><b>(真下委員)</b>  今、テレビドラマの中でもですね、「なつぞら」ではクマが大変可愛いイラストで紹介されていますので、やはりそういった可愛いクマを駆除することに対する、人間としての気持ち、当然生まれてくるわけです。  しかし、北海道はアライグマで十分経験しておりますけれども、可愛いラスカルを殺してはならないという、放してしまったことでアライグマの被害が増えているということです。ヒグマとはどうやって共存していくかということに対して、相当知恵を絞らなきゃならないと思います。  今、環境省の通知でクマ類には麻酔銃は原則使用しないと、こういうことを私が初めてお聞きをして、承知をしました。ですから、そういうことが分からない中で、クマとどうやって共存していくかということ言えば、クマに対して学習効果の高い追い払い方法を考えることも必要ですけど、人間の方もクマの特質や人間がどのように対応するかということをよく学習していく良い機会になるのではないかと考えたところです。</p> <p><b>(六) ヒグマの問題行動に関する背景について</b>  ヒグマの生息数が増加しているのに加え、人間や銃を怖がらなくなる、いわゆる新世代クマといわれるような行動形態の変化が起きております。住宅地への侵入や、過疎化に伴う緩衝地帯の後退・減少、デントコーンの増加によるヒグマのエサと隠れ家の変化などによる多くの課題が生じてきていると考えられるそうです、専門家の御意見によると。全道における非問題ヒグマと問題ヒグマの違い、問題ヒグマの状況や行動変化等について、道としてどのように把握されているのでしょうか。</p> <p><b>(真下委員)</b>  ヒグマは大変、個性が強いそうです。それから、</p>	<p><b>(動物管理担当課長)</b>  駆除方法などについてでございますが、ヒグマの駆除は、銃器や、箱わなによって行われており、捕獲にあたりましては、ヒグマの出没状況や地域の状況を十分に勘察し、関係機関等が連携しながら、安全を優先した最も効率的な手法をその都度選択しているものと伺っております。  駆除の手法とヒグマの学習効果との関係性につきましては確認されておりましたが、学習効果の高い追い払いなども導入していく必要があると考えております。  また、麻酔銃につきましては、射程が短いことや、効果が得られるまでに時間を要することなど、安全の確保が課題であり、環境省の通知におきましても、クマ類には原則、使用しないこととされております。  道といたしましては、引き続き安全で効率的な捕獲手法の検討・助言を行うほか、捕獲従事者の確保対策にも取り組んでまいります。</p> <p><b>(動物管理担当課長)</b>  ヒグマの行動についてであります。専門家によりますと、道内の多くの地域で、ヒグマの生息数が増加し、生息域も拡大している可能性があることや、狩猟のため、ヒグマを山奥まで追いかけるような機会も減少したことなどから、人を見ても危険と感じない個体が増えてきていることが指摘されているところでございます。  また、ヒグマは基本的に山林などの連なりを移動するなどして、人間との遭遇を避けますが、不意の遭遇を繰り返すことで、人や場所に慣れて行動がエスカレートし、人家のゴミを漁ったり、農作物を食害するなど、管理計画による有害性の判断基準により捕獲対象となるような、問題個体に転ずることが指摘されているところでございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>成長過程において、若い雄グマが問題行動を起こすことが多くて、ずいぶんと個性があるそうです。そのほかに、ヒグマがなぜ絶滅しないで生息できているかという点、冬眠することで冬に足跡を付けて撃たれることがなかった、冬眠することも生息を可能にしている要因だと聞いております。</p> <p>せっかくヒグマが生息できている環境の中で、これは大事にしなければいけない自然だと思うんですね。</p> <p>そこで、ヒグマの高い学習能力だけでなく、人間側の方も学習能力を高めなければいけない、体制整備も必要になってくると考えているわけです。</p> <p><b>(七) 振興局の職員配置状況について（市町村の負担）</b></p> <p>ヒグマだけでなく、生物多様性にかかわる専門職として、各振興局への職員配置が要望されて久しいわけですが、どのような配置状況となっているのか。また、道として、十分とお考えなのか。職員研修はどのように行われているのか、これまでの実績と、今後の取組について伺いたいと思います。</p> <p><b>(再)</b></p> <p>研修会も開催しているし、担当者会議も開催しているし、一瞬、十分なのかなと思ったのですが、そうではなく、この研修会も1日の座学だということで、道でも環境技術職の方が採用されているので一歩前進したとしても、やはり専門性から考えますと、道の人材育成では不十分だと多く聞こえてきております。</p> <p>エゾシカの場合は、計画的な保護管理を行う、民間ですが、DCCという研修がございます。</p> <p>これと同じようにベアですので、BCCですね、ヒグマの管理を行う人材を専門的に育てながら、ヒグマ管理官というものを置けるようにしないと、北海道のヒグマとの共存は難しいと思われまして。</p> <p>研修をするということは、それはそれでいいのですが、ヒグマは毎日歩いて地域のことをよく分かっているわけですよ。ところが、人間の方は、なかなかそうはなっていない。ですから、座学だけでなく、現地でどのような環境の中でヒグマが暮らしていて、クマの道がどこにあって、そのクマの道を人間が横断させてもらっている状況がどのようにあるのかを含めて、考えていく必要があると思います。</p> <p>研修内容をより充実させて、地域対策協議会も行うということですけど、地域対策協議会の中心的な人材として活躍できるよう、研修会の成果も踏まえつつ、今後、検討していく必要があるのではないかと考えるのですが、どうでしょうか。</p> <p><b>(真下委員)</b></p> <p>そういうお考えで取り組んできたと思うのですが、しかし、その成果が、今、頻繁に、都市部にヒグマが現れてきて、多くの市民生活の中に問題が起きている。そういうことになっているわけです。ですから、実践的な経験交流も行いながら、これからブラッシュアップしていくと思うのですが、やはりスピードを高めることと併せて、専門家の育成は不可欠であ</p>	<p><b>(生物多様性担当局長)</b></p> <p>振興局の体制についてでございますが、地域における野生鳥獣の保護管理につきましては、各振興局の環境生活課自然環境係の職員が対応しており、ヒグマ対策について、より専門的に適切な保護管理を推進できるよう、専門家を交えて、ヒグマの生態や行動の情報共有と地域の課題解決のための検討を行う担当者会議を開催するなど、職員の資質向上に努めてきたところでございます。</p> <p>また、今年度から、各地域で、ヒグマの保護管理に対応できる人材を育成するために、市町村及び振興局職員を対象として研修会を開催し、地域における適切なヒグマ保護管理を推進してまいります。</p> <p><b>(生物多様性担当局長)</b></p> <p>専門職の配置についてでございますが、道では、ヒグマの保護管理に対応できる人材を育成するために、担当者会議や研修会を実施することとしておりますが、これと併せまして、地域で問題が生じた場合には、必要に応じて、本庁や他の振興局で経験を積んだ職員による応援も行っていく予定でございます。</p> <p>このことにより、実践的かつ速やかな職員の資質の向上に加えまして、地域における適切なヒグマの保護管理を推進することができるものと考えております。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>           と思いますので、これは是非、検討していただきたい。早急に、検討していただきたい。            ヒグマ社会の方は人間とのあつれきが限界点に達しているということが今の状況だと思いますので、是非、ヒグマ管理官の設置を含めて、きちんとやっていただきたいと思います。         </p> <p> <b>(八) ヒグマ観の変化に関する道民意識について</b>            職員の研修はもとより、ヒグマと共存していくために、先程、野幌の小学校、中学校の生徒さんを対象に研修を行ったということですが、市民研修会、市民学習会というのは、この間、取り組まれていないようです。エサ、コンポスト、キャンプ等、クマとの付き合い方を考える市民講座などをもっと充実させていくべきではないかと考えるのですが、いかがでしょうか。         </p> <p> <b>(真下委員)</b>            様々な機会というのですが、具体的に、早急に、市民研修などを行う機会を作っていくことが必要であります。            札幌市南区南沢地区まちづくり協議会というところが「ヒグマと人との出会い」と題して、住宅地に出てくるヒグマの実態と安全対策について、「ヒグマの会」副会長の山本牧さんの講演、南区役所地域安全担当係長の吉田さんのお話をブックレットにしております。非常に勉強になりました。だいぶん前の話になりますが、こういう意識が市民の中に育まれて、ヒグマと共存していくための人間側の知恵として、ずいぶん役に立ったということで、非常に評価が高いブックレットだそうです。是非、こうしたことを道の事業としても考えていただきたいと思います。         </p> <p> <b>(九) ポロト湖周辺ヒグマ管理の対応について</b>            ウポポイの視察の際、私、ポロト湖周辺の雄大な森林地域の周遊も考えられているんですかと聞きましたが、考えているということでした。ポロトの森散策マップをいただいたんですけど、相当奥の方まで入っていくことになっています。この地域のヒグマは、環境省のレッドリストで「絶滅の恐れのある地域個体群」に選定されておりまして、鳥獣保護区となっているということですから、ここに住んでいるクマは、人間が危険な存在だとわかっていないし、ウポポイができることで、後背地のキャンプ場などに、100万人が目標ですから、利用者が多く入ることが予想されるわけです。ヒグマの方は遭いたくないけれども、遭遇してしまう。好奇心が強いので子グマとか出てくる可能性が非常に高いです。ヒグマと遭遇する可能性が高まる中、軋轢をどう回避し、トラブルにどう対応するのか、どう考えていらっしゃるのでしょうか。         </p> <p> <b>(真下委員)</b>            不意の遭遇を避けるために、餌をやったりすることがないよう、私たちは思うわけです。ところが、観光のような気持ちで来ている方は、餌をあげてしまったりする可能性があります。お聞きしますと、インスタグラムに載せるためにクマに近づく方もおります。野生のヒグマはクマ牧場のクマと違いますから、付き合い方はよく周知をしていかないと、誤解した利用者の中で問題が起きないとしても、次の方にトラブルが降りかかる可能性があるのです、ここのところは新たな         </p>	<p> <b>(動物管理担当課長)</b>            道民の理解促進に向けた取組についてでございますが、道では、ヒグマによる人身事故を防止するため、春と秋にヒグマ特別注意期間を設け、主に、山菜採りやレジャーなどで野山に出かける方々に向けて、ヒグマに出会わない方法や出会ったときの対応などにつきまして、広く普及啓発に取り組んできたところでございます。            近年、市街地へのヒグマの出没が多発しておりますことから、ゴミの管理をはじめとした防除対策やヒグマに関する正しい知識を広めることが必要であり、様々な機会を通じて啓発などに取り組んでまいります。         </p> <p> <b>(生物多様性担当局長)</b>            ポロト湖周辺のヒグマ対応についてでございますが、ヒグマは道内全域の様々な環境に生息しておりますが、事故の多くは不意の遭遇や問題個体による特異な行動が原因でございます。            ポロト湖周辺はヒグマの生息域でありますことから、白老町や関係者等とも連携しながら、利用者に対して、他の地域と同様、不意の遭遇を避けるため、野山では音を出しながら歩くことですか、問題個体をつくらないため食べ物やゴミは必ず持ち帰るなど、基本的な対応についての普及啓発に努めるとともに、目撃情報等があった際には適切な措置を講ずるなど、事故の未然防止等に取り組む考えでございます。         </p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p>調査を行うことと、侵入する側は人間の方ですから、侵入者に対する教育もきちんとやっていただきたいと思えます。</p> <p><b>(十) 新たな調査と管理計画の見直しについて</b>  ヒグマとどう共存するのかを考えるために、私は、新たな調査が必要だと考えます。以前に、バラ線を張って、そのバラ線について毛でDNAを鑑定していたということで、問題グマが出たから捕獲したのだけれど、実はDNA鑑定するとそのクマではなかったということがあるようなので、新たな調査をして、もう少し管理しやすいようにして、管理計画を見直していくことが必要な時期になっているのではないかと考えます。</p> <p>また、電気柵の設置は、電気柵を貸し出しするということになってはいますが、費用面でも支援が必要になるのではないかと考えますし、電気柵の張り方が下手だとかえって危ないそうですので、そういった教育も必要だと考えます。</p> <p>今後、ヒグマの保護管理にどう取り組むのか、生物の多様性にどのような姿勢で臨むのか。部長の見解を伺いたいと思えます。</p> <p><b>(真下委員)</b>  ヒグマのみならず、アライグマやエゾシカ、アザラシなど、大きな鳥獣の被害が北海道にはあります。それは、人間社会からみた被害なわけで、向こうの動物から見ると自分たちの生息エリアに勝手に入ってきた人たちという見方をされるのかもしれませんが、やはりここところはしっかりと折り合いを付けていくこと、それから、本当にヒグマの環境が大きく変わってきていますので、対策を遅れることなくしっかりとっていただきたいということを申し上げて、質問を終わります。</p>	<p><b>(環境生活部長)</b>  ヒグマの管理についてでございますが、現在のヒグマ管理計画は、平成29年度から令和3年度までの5か年間の計画であり、新たな計画につきましては、出沒状況や捕獲数など近年の動向、あるいは、ただいま委員からご紹介がありました手法、そういった調査を活用しながら、また、専門家の意見を伺いながら、策定する必要があると考えているところでございます。</p> <p>また、捕獲や電気柵などの被害防止対策に対する国の支援などにつきましても、農政部と連携して情報提供に努めてまいりたいと考えてございます。</p> <p>道といたしましては、引き続き、市町村や関係機関などと連携しながら、人里への出沒を抑制し、人身被害を防止するとともに、農業被害の軽減に努め、人とヒグマが共存できる社会を目指してまいりたいと考えてございます。</p>